ISSN 1341-4364

近世哲学研究

第 20 号

薗田 坦 名誉教授 追悼号

薗田　坦 名誉教授　略歴・業績一覧　1

エックハルトにおける “Grund” の問題 —— 薗田　坦　13

ヘーゲルにおける現実と主体 —— 山脇　雅夫　41

ヘーゲルにおけるセクシュアリティ —— 竹島あゆみ　55
——愛、快楽と必然性——

神経と宇宙 —— 次田　憲和　78
——神経ネットワークの宇宙的進化についての終末論的考察——

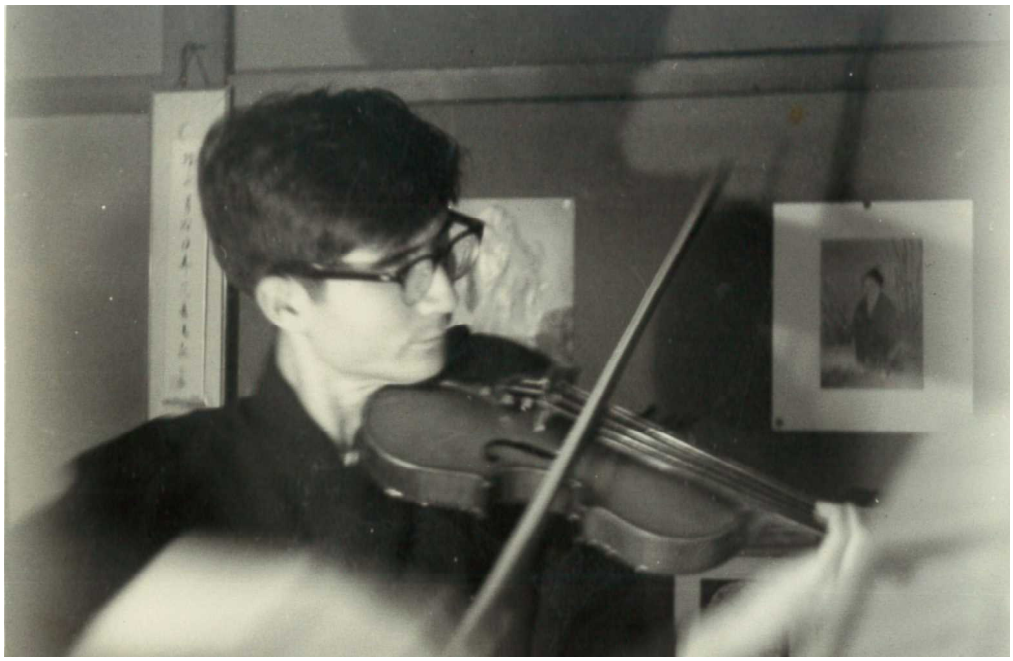
多元的宇宙間の断絶と連続 —— 冲永　宜司　93
——それ自身の他者、創発、生命の跳躍——

シェリングと思弁的転回 —— 浅沼　光樹　110
——グラントのシェリング主義について——

実存主義再考 —— 安部　浩　128
——「最高に厳粛な学」の再興——

2016

近世哲学会



薗田 坦先生（京都大学大学院の頃）

編集後記

昨年四月二二日に薗田 坦名誉教授がご逝去になった。享年七九歳。和して同ぜず、温厚な長者の面影のなかに壮年の気魄と青年の鋭敏さを失われなかった稀有のかたであった。本誌にとっては創刊者である。ご冥福をこころからお祈りしたい。

本号には受業生から六編のご寄稿があった。どなたも本務ご多用中のはずであることを思うとき、ただ感謝するほかない。のみならず薗田先生ご自身の修士論文を掲載できた。これで私たちは先生の初心を目の当たりにすることができるわけである。掲載をお認めくださった薗田亮子様、校訂・翻刻の労を取られた浅沼光樹氏に特にお礼申しあげたい。

中垣のへだてはあれどへだてなく祈るはおなじ道の行く末、という歌がある。福井藩の賓師に招かれてゆく横井小楠（文化六年―明治二年）に長岡監物（文化一〇年―安政六年）が贈ったものだ。小楠は実学党親民派の巨頭で、監物は明徳派の元祖。いわば仇同士だ。ついに出盧してゆく仇になにか門出の祝いを贈ろうとしたとき、出番を迎えた道という言葉が印象的だ。道ってなんなの、と現代人なら返してくるだろう。たしかにそれはその通りなのだが、しかしまた道に関して問われるべきなのは、道とはなにか、ということではもともとないのかもしれない、と思う。

道といえば、『論語』里仁篇の「子曰朝聞道夕死可矣」が出典だろう。だが、これを朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり、と読んではいけないのだという。古注の説くところを活かせば、朝に道ありと聞かば夕べに死すとも可なり、と訓じなければ真意が伝わらないのだそうである。だとすると、道が行われていることさえ知ったならば安心して死ねるのに、と孔子は言い残したわけだ。道とはSoseinではなくDaseinのみが問題となるものらしい。

この道のリアリティが蘇ることはもうないのだろうか。道可道非常道ともいう。どうするかは、私たち次第である。践まるべき道が見えてくることを、いま願っている。

毎号のことながら、本号の刊行のために貴重な時間を費やしてくださった方々に厚くお礼を申し上げる。（F）

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

祝辞　酒井　修

ハイデッガーにおいて哲学を　田中　敦
——現存在の現象学的存在論考究——

カントと初期フィヒテとの接点　北岡　武司

義務論としてのカント倫理学　蔵田　伸雄
——功利主義との対比——

仮象と反省　山脇　雅夫
——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——

第二号（一九九五）

カント哲学における「経験」概念について　福谷　茂
——「世界」概念導入のための端緒として——

ヘーゲルのコルポラツィオーン論　早瀬　明
——市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み——

工学はどういうタイプの学問か　齊藤　了文

信仰の情熱とその逆説　田中　一馬
——キェルケゴール『おそれとおののき』におけるアブラハム解釈をめぐって——

ハイデッガーのヘーゲル解釈　橋本　武志
——意識の二義性と意識の転換——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点　子野日俊夫

読書人世界から学者共和国制度へ　福田喜一郎
——理性を制度化しようとしたカントの試み——

デカルトにおける愛の区別について　武藤　整司

未済の人倫　石田あゆみ
——『精神の現象学』主—奴論の一解釈——

ガダマーのディルタイ批判　折橋　康雄
——『真理と方法』を中心に——

第四号（一九九七）

一本の綱（Seil）としての人間　吉川　康夫
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題——

デカルトの懐疑について　安藤　正人
——『省察』の「反論と答弁」を資料として——

市民と国家の媒介　小川　清次
——「国民」形成の一側面——

『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について　橋本　武志

自然主義的存在論の隘路　次田　憲和
——フッサールの「領域的存在論」における超越論的構成の「自己関係的構造」——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」　武藤　整司
——デカルト的行論の一考察——

ディルタイに於ける客観的精神の概念について　折橋　康雄
ハイデガーの他者論　安部　浩

第六号（一九九九）

デカルトにおける《真理》と《存在》
——明晰かつ判明に知得されるもの——　倉田　隆
ヘーゲルの根拠論　山脇　雅夫
——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理　次田　憲和
——フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座——
シェリング哲学の出発点　浅沼　光樹
——人間的理性の起源と歴史の構成——

第七号（二〇〇〇）

——薗田　坦教授　退官記念号——
薗田　坦教授　略歴・業績一覧
《講演》
近世哲学における神の問題　薗田　坦
近世哲学とはなにか　福谷　茂
——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭　武藤　整司
——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味　山脇　雅夫
——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考　橋本　武志
——可能性概念を手がかりに——
生と音楽　折橋　康雄
——ディルタイに於ける生と音楽の時間性の問題をめぐって——

第八号（二〇〇一）

自由の軌跡　北岡　武司
——批判哲学における自由の可能性の意味——
認識か解釈か　福谷　茂
——新しい哲学史像のために（二）——
G・ハーマン相対主義説の論理　田中　一馬
歴史的理性の生成　浅沼　光樹
——シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義——
《書評》
北岡武司著『カントと形而上学—物自体と自由をめぐって』　橋本　武志
N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カント『純粋理性批判』註解』　長田　蔵人

第九号（二〇〇二）

『存在と時間』と哲学の方法（形式的挙示再考）　田中　敦
フッサールにおける他者経験の構造と発生　榊原　哲也
ウィトゲンシュタインの「規則に従う」論の若干の考察　子野日俊夫
復古のもとでの立憲主義　竹島あゆみ
——ヘーゲル法哲学講義（ベルリン一八一九／二〇年）の二つの講義録——
《書評》
ヤーコプ・ベーメ著（薗田　坦訳）『アウロラ—明け初める東天の紅』　福谷　茂

第一〇号（二〇〇三）

十年の歩みを顧みて　薗田　坦

デカルトと自覚の問題
——コギトの弁証法性——　実川　敏夫

アレゴリーの復権をめぐって
——ガダマーとポール・ド・マン——　高田　珠樹

行為の規範としての礼節（decorum）の意義
——クリスチャン・トマージウスにおける法・道徳・礼節の区別——　福田喜一郎

格率とその「枠組み」
——カントの道徳判断論の新しい理解を目指して——　西川小百合

《書評》
福居　純著『デカルト研究』　浅沼　光樹

第一一号（二〇〇四）

カントにおける崇高の経験　牧野　英二

イデオロギー批判の技術哲学
——マルクーゼ・ハーバーマス論争を手掛かりに——　橋本　武志

感性の弁護（Apologie für die Sinnlichkeit）とは何か
——カントの「直観」概念の見過ごされたアスペクト——　長田　蔵人

『純粋理性批判』の反実在論的解釈
——その内実と意義——　千葉　清史

《書評》
武藤整司著『人間の輪郭—共生への理念』　吉川　康夫

第一二号（二〇〇五）

形而上学的認識と超越論的認識
——カントと認識の形而上学・序論——　大橋容一郎

「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか
——私に付属する性質が消去された視点からの考察——　冲永　荘八

反現象学の道
——フランツ・ブレンターノにおける非超越論的現象学と個体主義的存在論に基づく直接実在論的認識論について——　次田　憲和

超越論的反省とは何か
——「反省概念の二義性」章の三段構造とその意味——　佐藤　慶太

第一三号（二〇〇六）

根拠律批判から理性批判へ
——「ア・プリオリな総合」の起源をめぐって——　石川　文康

ショーペンハウアーにおける〈物自体としての意志〉概念の導入
——意志の否定と道徳の両立のために——　多田　光宏

《書評》
三つの『純粋理性批判』新訳　佐藤　慶太

第一四号（二〇一〇）

ヒュームの認識論についての覚え書き

小林　道夫
——デカルトの認識論との対比において——
ライプニッツの創造論（一）　福谷　茂
無制約者と知的直観（一）　浅沼　光樹
——『ティマイオス註解』から『自我論』へ——

第一五号（二〇一一）

意志の無限後退論　久呉　高之
——ライルと意志理論——
歴史・時間・事実　福谷　茂
——哲学史研究のための予備的考察——
無制約者と知的直観（二）　浅沼　光樹
——『ティマイオス註解』から『自我論』へ——

第一六号（二〇一二）

カント倫理学における「方法の逆説」と人権の問題　御子柴　善之
叡知的性格における心術の唯一性と根源悪　福田　喜一郎

第一七号（二〇一三）

承認と和解　竹島あゆみ
——ヘーゲル社会哲学の二つの原理——
ライプニッツの創造論（二）　福谷　茂

第一八号（二〇一四）

二世界解釈と二側面解釈　千葉　清史
——そもそも何が問題だったのか？——
京都学派の哲学史的洞察　浅沼　光樹
——西谷啓治の卒業論文「シェリングの絶対的観念論とベルグソンの純粋持続」について——

第一九号（二〇一五）

Realität の二義性　檜垣　良成
——中世から近世へと至る哲学史の一断面——

編集委員会　委員長　福谷　茂
委員　林　拓也
太田　匡洋
浅沼　光樹
企画・編集

執 筆 者 紹 介

薗田　　坦	京都大学名誉教授・日本学士院会員
山脇　雅夫	高野山大学教授
竹島あゆみ	岡山大学教授
次田　憲和	大阪芸術大学他非常勤講師
冲永　宜司	帝京大学教授
浅沼　光樹	京都大学非常勤講師
安部　　浩	京都大学教授

（執筆順）

近世哲学研究　　第 20 号

2017 年 3 月 25 日　発行

編集・発行　近世哲学会
編集代表　　福谷　茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/
TEL（075）753-2444

定価 1200 円（本体 1143 円）

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 20

Dedicated to the Memory of Professor
Dr. Tan SONODA (1936-2016)

Curriculum vitae and Bibliography of Professor Dr. Tan SONODA 1

Tan SONODA : Das Problem des Grundes bei Eckhart 13

Masao YAMAWAKI : Wirklichkeit und Subjekt in Hegels Philosophie 41

Ayumi TAKESHIMA : Sexualität bei Hegel 55
—— Liebe, Lust und Notwendigkeit ——

Norikazu TSUGITA : The Neural Network and the Universes 78
—— A Eschatological Essay on the Cosmic Evolution of Neural Networks ——

Takashi OKINAGA : Discontinuations and Continuations between Plural Universes 93
—— Its own other, emergence, élan vital ——

Kouki ASANUMA : Schelling and the Speculative Turn 110
—— On the Schellingianism of I. H. Grant ——

Hiroshi ABE : Existentialism Revisited 128
—— Reviving “la doctrine la plus austère” ——

2016

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University